

作業現場の 「迫力に興味津々」

京田小 山形オートリサイクル見学



鶴岡市の京田小学校（長澤和博校長、児童125人）の5年生が10日、自動車リサイクルを手掛ける山形オートリサイクルセンター（酒田市広栄町二丁目、伊藤雄一郎社長）を訪れ、工

場内を見学。自動車の解体やリサイクルについて学んだ。

同社は1955年、自動車中古部品の販売業として創業し、64年に自動車解体業に転換。現在はリユースパーツ販売や金属原料のリサイクルなど車の循環産業を展開している。地元の小学生を対象に体験学習の場を提供しているほか、交通安全団体への寄付活動など地域貢献にも積極的に取り組んでいる。

山形オートリサイクルセンターの工場内を見学する京田小の児童たち

この日は同校の5年生15人が訪問。児童たちは社員から説明を受けながら、車から取り出した国内部品の生産工場、リユース部品の保管倉庫、廃車のエアバッグ作動処理やエアコン排ガス作業などを行う処理工場などを順に見学した。

児童たちは「廃車になった車のナンバーはどうなるのですか」「注文の多い部品は何ですか」など熱心に質問。特殊車両を使った廃車の解体、プレス作業現場では、特殊車両の大きなアームが頑丈な車から次々に金属などを取り外す迫力に驚きながらも、興味津々で作業を見学していた。

水野ひかりさん（11）は「普段見ることができない車の部品や、使えなくなった部品も資源になっている話などを聞き勉強になった。車に興味が増えた」と。伊藤社長は「役目を終えた後の車がどこに行くのか、新品を作ることと同じくらい、リサイクルを考えることも大切だということを子どもたちに知ってもらえたら」と話した。